

◆ 今週のコメント

- ・ アメーバ赤痢(腸管アメーバ症)の報告が1例(男性, 40歳代)あります。症状は粘血便で、推定感染地域は国内です。本年の累積報告数は10例となっています。
- ・ 手足口病の定点当たり報告数は0.98(40例)で、本年で最も多い報告数となっています。例年、流行のピークは夏季ですが、秋から冬にかけても多少の発生が見られます。今後の発生動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は4.37(179例)で、過去5年間の同時期と比較して一番多く、本年で最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 10例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

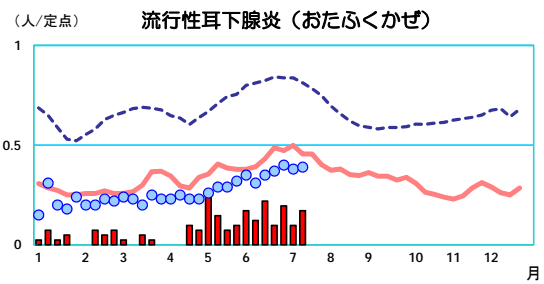
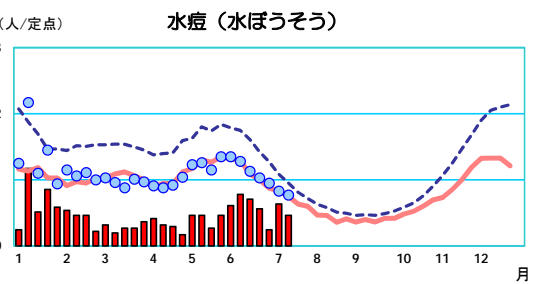
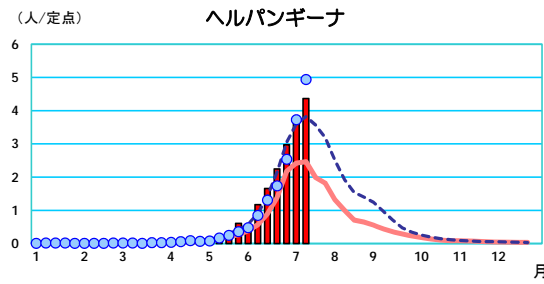
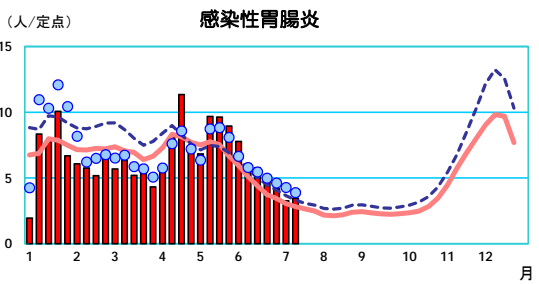
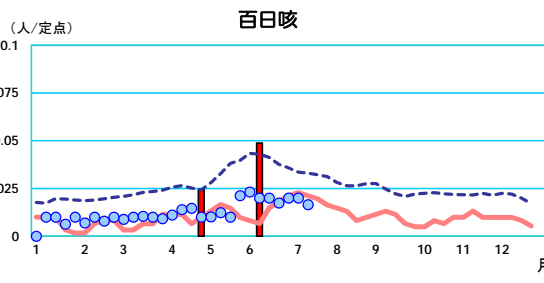
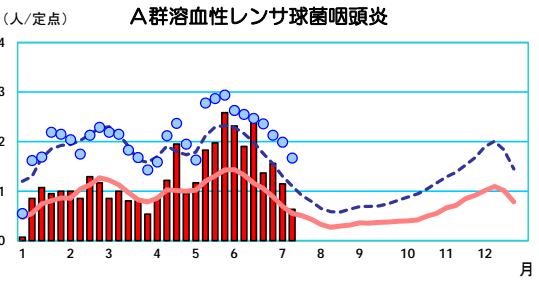
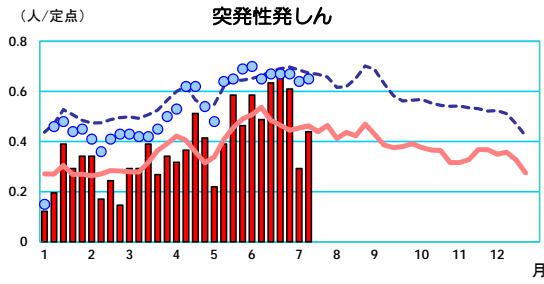
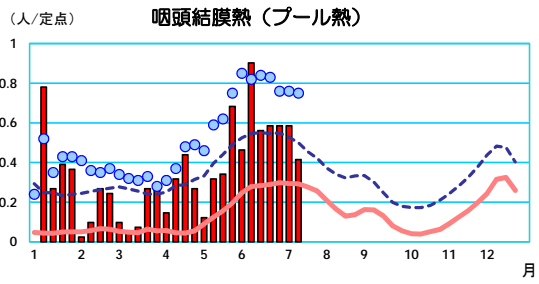
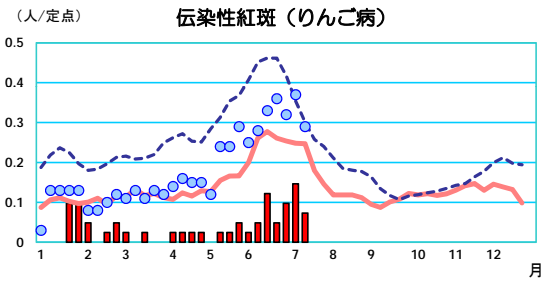
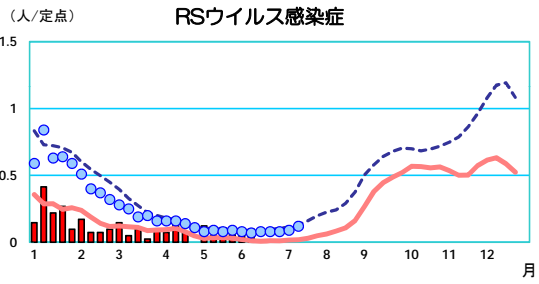
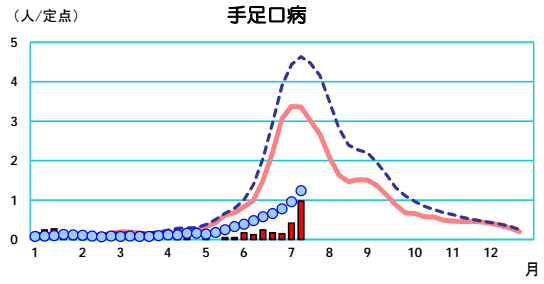
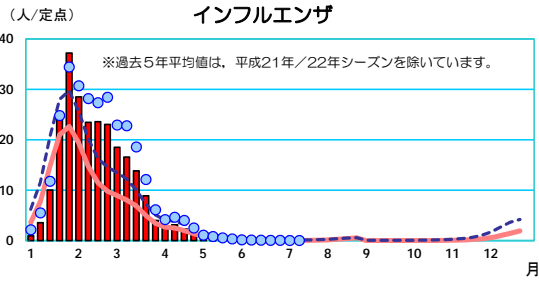
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.03	2
小児科 (降順5位まで)	① ヘルパンギーナ	4.37	179
	② 感染性胃腸炎	3.46	142
	③ 手足口病	0.98	40
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.63	26
	⑤ 水痘	0.46	19
眼科	流行性角結膜炎	1.40	14

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

(注) 京都市のデータは、平成26年7月24日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



第29週(7月14日～7月20日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

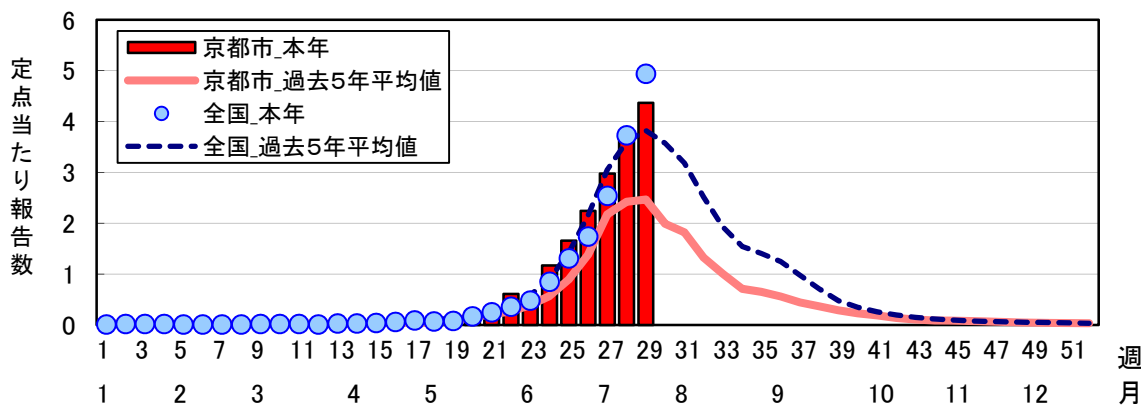
ヘルパンギーナの定点当たり報告数は4.37(179例)で、過去5年間の同時期と比較して一番多く、本年で最も多い報告数となっています。第20週(5月12日～5月18日)以降、10週連続で過去5年平均値を上回る状態が続いています。ヘルパンギーナは流行の季節性が明確で、毎年7月を中心として6～8月に増加します。

都道府県別では、47都道府県中39都道府県で前週より増加しています。10都道府県で警報開始基準値(*)『6.0』を超えており、特に近畿6府県中4府県で警報開始基準値『6.0』を超えています。今後の発生動向にご注意ください。

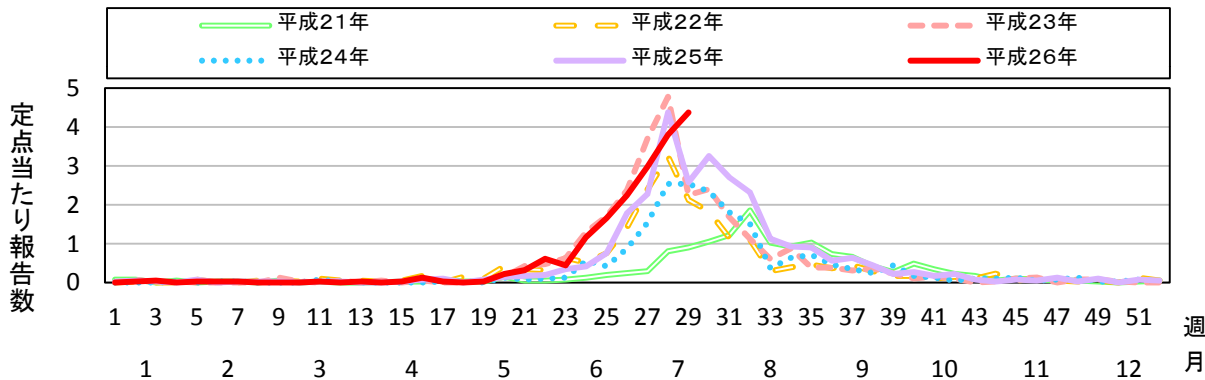
この疾患は、感染者の鼻汁や咳などの飛沫によって感染したり、便などに排出されたウイルスが手指を介して感染するので、予防にはうがいと十分な手洗いの励行が重要となります。

(*)警報開始基準値とは、大きな流行が発生または継続しつつあると疑われることを意味し、国立感染症研究所感染症疫学センターがこれまでの感染症発生動向調査データから基準値を定めています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



本市の過去5年間との週別比較



都道府県別定点当たり報告数の推移

